

## 映画時評

### 新聞連載「シネマ近見」自注

藤田明 映画評論家

新聞連載と私の足跡はかなり関係深い。今世紀に入ってから月一回の朝日「展望・三重の文芸」が計15年半で終わって後は、月二回の伊勢「シネマ近見」だけとなった。2006年以来なので11年に及んでいる。今回は2017年1月からこれまでに関し、自注を施しておきたい。掲載は第1・第3の日曜である。

#### 原節子、その一面（1月15日付）

義兄・熊谷久虎監督に制約された生涯と見る。津の彼岸花映画祭2016の当日パンフレットへも寄せたが、少し形は違う。名女優礼賛の文章の多い中で真実は、と問い直してみた。

#### 『アイヒマンを追え!』（2月5日付）

R・シュトラウスとヒトラーの接点に関心を抱かぬ演奏家やファンへの疑問が冒頭。戦後、西ドイツの権力側に残ったナチ残党と闘うバウワー。ヘッセン州の検事長でありながらアイヒマンが追える分権的システムもこの映画で知った。L

GBTの件を持ち込んでの第2主題も成功。R・ルクセンブルグの絵という細部など心にくい。上半期のトップ作である。『ヒッチコック／トリュフォー』（2月19日付）

二人の実際の映像はごくわずか。監督の立場は無私に近く、期待外れ。『めまい』へのスコセッシの異論が面白い。短いバザンの映像で、サドウールと語り合えた日のことを思い起こす。バザンを持ち上げ、サドウールを低める昨今の評価に違和感を私は抱く。文中、『恋ざんげ』に及んだのは、ヌーベルバーグ賛美の向きがアストリユック認識を怠っているのでは、という疑問から。

#### 日本映画2つのベストワン（3月5日付）

『この世界の片隅に』は全面肯定者が多く、批判者は少ない。そこで記したくなった。文化映画の首位となったドキュメンタリー『ふたりの桃源郷』はテレビ局発の問題点を抱える。テレビと映画の違いを改めておたがい考究しては、どうだろう。

#### 2016年外国映画ベストテン（3月19日付）

グアテマラの『火の山のマリア』を1位にした理由を含む。アメリカ映画を久しぶりにテンに選んだ。『トランボ』である。日本映画の選出見送りは体調も一因だが、多くの場合、

高齢とは合わなくなってきたから。

なつかしの内外3作（4月2日付）

志摩市で『ローマの休日』、名古屋で『たそがれの女心』、四日市市博物館で『飢える魂』などと3月には旧作に接した。川島雄三の続編上映会の予定が1年先とは、どう解したらいいのか。

『鳥の道を越えて』（4月16日付）

キネ旬文化映画一位だったという記憶がよみがえって、津での小さな上映会に申し込んだところ、30名で満席。補欠扱いとなる。辞退者が出たため可と電話連絡が入った。トブルで『飢える魂』の終了が遅れ、昼食もそこそこに津へ戻り、かけつけたのである。見事な、これこそ記録映画。終わって滋賀からの専門家の感想には抵抗感を抱いたが、今井監督から裏話なども聞くことができ、5月の全国小津ネット総会の折、再会につながっていく。『ヤクザと憲法』についても文中で触れている。記録映画というよりこちらはテレビドキュメンタリーの感。紙面の同じページに京都の「東西ドイツ映画ポスター展」の紹介記事。6月までであったのに行けずじまい。ミュシヤ展の方は上京時に実現するが。

増村保造のこと（5月7日付）

『セックス・スケッチ・第二の性』が意外に面白く、寺内大吉の原作を図書館の地下書庫から出してもらって読むことにつながった。今日ならLGBTと関係する件へ増村なりに立ち向かったとも言えよう。劇作家の田中澄江と夜遅く津・橋北中水難事件の現場に赴く車中で新進・増村への高い評価を耳にできたことも添えた。

小津安二郎と今村昌平（5月21日付）

全国小津ネット総会では、新会長が日本映画大学の高橋世織さんを講演に招いた。今村は助監督として小津に就いたが、2人の作風は違う。しかし共通面ありという趣旨。話の中に小学校で今村の後輩だった私のことが登場し、「代用教員・小津安二郎」を発表した年に今村は映画学校を開いたとも。その結びつけ方に舌を巻く。成瀬を一本見たとか、ミュシヤ展、池田理代子展へ寄ったと添えた。

『台北ストーリー』（6月4日付）

楊昌徳の代表作再公開に合わせ、最初期の1本が劇場公開された。画面の9割は暗い。照明はどうなっているのか、と言いたい、今は亡き監督、新潮流の作風に好感を抱きもしたのである。

『家族はつらいよ2』（6月18日付）

山田洋次肯定派・否定派のどちらにも属さない立場から率直なところを記す。登場の若い世代に生彩がないあたり、どう見るかという一件も。

アメリカ映画礼賛（7月2日付）

ワイラー『ミニヴァー夫人』ではG・ガースン、カザン『草原の輝き』とホークス『男性の好きなスポーツ』では一般には知られない女優を軸に記す。昨今のハリウッド作品に興はうすくという立場で、かつての充実期に触れなくなった。

内外ドキュメンタリー考（7月16日付）

清水信追悼とからんで亀井文夫のこと（没後30年）、アイヒマンの裁判記録『スペシャリスト』評を組み合わせしてみた。

『セールスマン』（8月6日付）

A・ミラーの「セールスマンの死」の舞台稽古など何回か挟まれる。映画の進み行きと関連ある部分なのだろう。シナリオがあると比較しやすいわけだが、記憶だけでは至難。その辺へ立ち入る作品評に出会えない昨今だけに挑みたいところ。検閲きびしいイランなのに社会性も浮上、日本映画がつかめないでいるところをつかんでいる。ブルカをとり去っ

た瞬間の女優の色気、アカデミー賞授賞式拒否を最初に表明しただけのことはある。秀作。

